

場としてのアジ研図書館の取り組み

常川 真央

大学などの学術研究機関のなかの図書館では、図書館利用者の情報収集の支援に留まらず、利用者の学び全体を支援する場である「ラーニング commons」が注目されており、学習や研究を支援する場としての役割が求められつつある。

当図書館はこうした「場としての図書館」への取り組みを強化するために、魅力的な空間と展示企画を提供してきた。本稿では、ライブラリー・コーナーでは取り上げられることが少ない「場としてのアジ研図書館」の取り組みについて紹介したい。「場としてのアジ研図書館」の主要な取り組みに、資料展示企画がある。当図書館では、主に開発途上国や新興国をテーマとして、対象地域を専門とするライブラリアンが、所蔵資料や研究員が所有する現地の写真などを使って資料展示を企画している。例えば二〇一三年には大型資料展として「イスラーム世界の女性たち」が企画され、二〇一四年度には大型資料展として「周縁から読む現代社会―アジア・アフリカの『マインリティー』」を、ミニ展示企画として「眼で見るブラジル―社会と人々―」を企画した。単に展示を行うだけでなく、ライブラリアンに

よるギャラリートークを開催するなどの創意工夫も行っている。

当図書館のなかで育まれた右のような展示企画は、他の図書館へも展開している。当図書館では、幾つかの大学図書館との共同利用制度を締結し、当図書館の資料を締結先の学生や研究者に提供している。さらに、共同利用制度を締結した大学図書館との共催で講演会や企画展示を行う。右に紹介した大型展示企画のうち、「イスラーム世界の女性たち」はお茶の水女子大学附属図書館の館内で展示され、「周縁から読む現代社会―アジア・アフリカの『マインリティー』」については東京外国語大学附属図書館の館内で展示された。このように、アジ研図書館自体がひとつのメディアとなり、他館へ資料展というコンテンツを発信する取り組みを行っている。

資料展だけでなく、ライブラリアンと利用者、利用者同士が交流する場を提供する取り組みも行っている。当図書館には利用者間の交流のためのスペースとして多目的室が設置されており、そこでは研究員自らが淹れたコーヒーを飲みながら利用者、ライブラリアン、研究員の垣根を越えた交流会が不定期に開催され

ている。また、利用者との相互作用によって生まれた企画もある。それが「アジ研ビブリオバトル」である。ビブリオバトルとは、「本を通して人を知る、人を通して本を知る」をコンセプトとした書評ゲームである。ビブリオバトルは、その年を代表する図書館の取り組みを表彰する「Library of the Year (2012)」の大賞を受賞しており、これまでの考え方にとらわれない図書館のあり方を表すものとして注目されている。公式ルールは次のとおりである。

- ①発表参加者が読んで面白いと思っただ本を持って集まる
- ②順番に一人五分間で本を紹介する
- ③それぞれの発表の後に参加者全員でその発表に関するディスカッションを二〜三分行う
- ④全ての発表が終了した後に「どの本が一番読みたくなかったか？」を基準とした投票を参加者全員一票で行い、最多票を集めたものを『チャンプ本』とする

(<http://www.bibliobattle.jp/kousiki-ruruより>)

当図書館では、職員間の交流を目的として、研究員と研究所職員を含む有志が月一回をベースとして開催する「アジ研ビブリオバトル」の会場を提供している。ここではライブラリアン、職員、利用者の垣根を越

えて互いに関心のある本を共有し、普段の図書館利用のなかでは窺い知れない趣味や人柄を知ることができ

る。研究所図書館という場所は、ある程度の研究の文脈が読み取れなければ利用することは難しい。「場としてのアジ研図書館」の取り組みによって、当図書館を訪れた学生や一般利用者が途上国の地域研究という文脈に気軽に触れられるような場にしていきたい。



ミニ展示会場でビブリオバトルが行われている様子

（つなかわ
所 図書館）
まお／アジア経済研究